

優秀賞（岩手県知事賞）

げんぞうじいさんと鮎

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

一年 梅村 琴和うめむら ことわ

朝五時、うつすらと霧がかかるなか、猿ヶ石川を漂う一艘の船に一人立っている男がいる。げんぞうじいさんだ。

彼はこの川で魚をとり、川と共に生きてきた人だ。投網を広げ、獲れた鮎を売りに出す。そうしてこれまで生活してきたのだ。

投網で売りに出せるほど魚を獲るのは、簡単なことではない。投網は、一つ壊れる位練習しろと言われる程、難しいのだ。彼の技術は投網が簡単そうに見えるくらいだ。

獲った鮎は冷凍して出荷するだけでなく、自分で塩焼きにして売ることもある。川魚の塩焼きもまた難しい。それも炭火で焼くため、火加減や効率よく焼くための工夫が必要になる。焼き上がりまでは約一時間。

その位の時間、鮎の状態を見て炭を足したり減らしたりして、丁寧に焼き上げる。職人にしかできない芸当だ。

そして、げんぞうじいさんの魅力はその人柄にある。見た目はいかつく怖い印象を持つ人だが、優しい人だ。優しいといっても普通の優しさではなく、不器用な優しさというのが当てはまる人だ。まさに豪快で、やることとやらないことをきちっと分けられる人なのだ。このような優しさは、水との関わりによって生まれてくるものだと思う。海の漁師というのも不器用な優しさがある人が多いため、この優しさは水を愛する者に生まれる感情なのではないだろうか。

げんぞうじいさんを支えてきた鮎は、清流と言えるようなところではしか生きることができない。鮎を育てる水をつくることから漁師の仕事は始まるのかもしれない。そうすれば、水を愛する漁師になれるのだろう。

鮎を育てる川をつくるためには、川について理解することが大切だ。今の川の状態を見て、何をするのが最

適かを考え、行動できてようやく、げんぞうじいさんのような人になれるのだろう。

川で生きていくために、げんぞうじいさんが身に付けた技術は計り知れないものである。今まで受け継がれてきたものが、ここで止まってしまったら、後世に残すものがなくなってしまふ。それではもったいない。これまで僕はずっと川と共に生きる彼の背中を見てばかりだったが、その背中を追いかけ、追いつき、過去から受け継がれしものを継いでいく番なのかもしれない。

水を愛し、水と共に生き、鮎を獲ってきたげんぞうじいさん。彼のその生き方は、受け継ぎ、そして残していくべきである。先人達が遺していったもの、考えをどのように受け継ぎ、遺していくかは僕たちが決めなければならぬ。

僕は、げんぞうじいさんが伝えてくれた先人達の知恵を受け継ぎ、伝えていきたい。そして、水が人間に与えてくれた恵みの大切さや偉大さを、僕自身が釣り

で身につけた知識をまじえて伝えていきたい。彼のような水と共に生きてきた人こそ大切にすべきだと思う。川や水への想いを理解し、彼のような漁師を目指して、一日一日を大切に生きていきたい。

水がつくり、水が育てたような漁師であれば川で生きていくことも可能になるだろう。水と人間は互いがお互いをつくり上げていく存在なのだ。水が歪んでしまったら元に戻して、人間が歪んでしまったら水に戻してもらえよう。な関係を築ける漁師を目指していきたい。そうすればいつか、川も水も鮎もしっかり応えてくれる日がやって来るだろう。その日を目指して、今できることを見いだして、精一杯生きていきたい。げんぞうじいさんの技術を受け継ぎ、川の上に一人で立つことができるようになる日を目指していく。

朝五時、彼は今日も川に立つ。

優秀賞（岩手県知事賞）

水の大切さと恐しさ

盛岡市立渋民中学校

二年 遠藤 嵩也

あまりにも身近すぎて「水」というものを深く考えたことがなかった。この機会に改めて水の大切さ、恐しさにについて考えることができた。

水とは、人間が生きるためにかかせない資源であり、飲み水、トイレ、プール、ダムなど、私たちの豊かな生活を維持するには、なくてはならない、必要不可欠なものです。もし蛇口をひねって、飲み水が出てこなかった場合、人はどうするでしょう。海水を蒸留し、飲料水にしたり、雨水を貯めてみたり、井戸を掘ってみようと試みたりし、その労力と費やした時間が割りに合わず、紛争が起こるに違いないと僕は思う。僕たちが今、何一つ不自由なく生活出来ていることを決つて当たり前と思つてはいけません。先人たちが今のこ

の豊かな生活を作り、保持してくれた賜だと感謝し、崇拜しなければならぬと思う。

二〇一一年、三月十一日。午後二時四十六分。今までに体験したことのない未曾有の大地震が発生した。火事や地割れ、津波をも引き起こした、東日本大震災だ。僕はその当時三歳という幼さで、これという記憶がほぼ無いに等しい。両親の話によると、僕は保育園児で、そのとき調度保育園で父兄の話し合いがあり、母もその場に居た為、一緒に家に帰ることができた。同じ岩手県で、同じ地震を受けたのにも拘らず、津波の影響で沿岸の方が被害が大きいことを知り、水の恐しさを初めて知った一瞬だった。僕と違って、家や家族、思い出の品、生まれ育った土地の崩壊、当たり前な日常を全て奪われた人たちが大勢いた。その人たちは、僕とは比べ物にならない恐怖と悲しみを知った。東日本大震災を知り、人間が自然現象の被害をゼロにすることは、不可能に等しいと思つた。

僕にも東日本大震災で亡くなった家族がいる。僕の

母親の出身は、陸前高田市で、そこには僕の母の両親と祖母が住んでいた。初孫だった僕のことをとても可愛がり、溺愛してくれていた祖母だった。あの日、仕事に出ていた僕の祖母は、地震の直後「高台に逃げろ」という周りの声を押し切り、家にいる曾祖母の事が心配で、車で家に戻ったそう。祖母も曾祖母も帰らぬ人となった。遺体も見付からず、似た人が見つかったと連絡が来たのは震災後二ヶ月も過ぎた頃だった。身元不明の遺体が体育館に収容された中に祖母と曾祖母も眠っていた。僕と母だけで遺体の確認へ行った。体育館の中は遺体の腐敗臭を防ぐ為に、線香の匂いで充満していた。津波の水で皮膚はふやけ、生前の面影は微塵もなかったと母は言っていた。歯科衛生士の母は、遺体の歯の形態を見て、自分の母だと確信したそう。母は泣き崩れ、僕はその母に寄り添うことしかできなかった。

水は、人間が生きていく上で必要不可欠なものだが、時に人間の全てをも奪い去るとてもつもないパワーと、

恐怖を兼ね備えている。僕の日常で見る水は、生虫や口や生虫などがあり、綺麗な水の元でしか生息しない蛍やクレソンなどに囲まれて生活している。この綺麗な水を汚さない努力を僕たちはしていかなければならない。その一方、水がもたらす被害についても多くのことを学ぶことができた。これからは、水を大切にしながら、水の災害から共存していくことが今の僕たちに求められる課題だと思う。なので、たくさんの経験を糧にして、生きていきたい。

優秀賞（岩手県知事賞）

下水道から明るい未来を創造する

盛岡市立大宮中学校

三年 佐藤 綾音

私は下水道について、今まで、きちんと考えたことがありませんでした。下水道について、インターネットや書籍でたくさん調べてみて、大切さが分かりました。

私達は暮らしの中で、一日およそ二〇〇から三〇〇リットルもの水を使用しています。私達が使い、汚れた水は下水道を流れ、処理されます。日本の污水处理人口普及率は九十一・七パーセントを誇ります。このように日々の生活を支える下水道は、持続可能な社会への大きな役割を果たしているのです。

二〇一五年、国連に加盟する一九三か国が賛成し、採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」。二〇三〇年までの課題解決に向けて、十七のゴールが設定されています。実は、下水道の働きはSDGsの三つのゴール

ル達成につながっています。また、このゴールの達成は私達の毎日の暮らしが大きく関わっています。

まず、一つ目のゴール「六・安全な水とトイレを世界中に」です。私達が使用した水は下水処理場で二十四時間休みなく処理されています。微生物の力も利用し、綺麗になった水は再び利用されます。下水処理場での浄化により、私達は安全で衛生的な水を利用することが出来ます。世界には、今でも安全な水を利用できない地域が多くあります。日本のように下水道が整備され、污水处理技術が発展し、世界中で綺麗な水が使えるようになってほしいです。多くの人が安全な水を使用することで「三・すべての人に健康と福祉を」の達成にもつながります。

二つ目は「十一・住み続けられるまちづくりを」です。下水処理は悪臭や蚊、ハエの発生を防ぎ、清潔で美しい町を保つことを可能にしています。大量に排出される汚水が速やかに処理されることで、私達の生活環境は向上します。しかし、家庭で残飯や食用油をそ

のまま流してしまうと、下水管が詰まり、処理がしづらくなってしまいます。私の趣味は料理で、よく食事を作ります。調理の中で「少しくらい大丈夫だろう」と食べ物残りかすや油をそのまま流してしまったことがあります。下水道について学んだことで、このような行動が多くの人に迷惑を掛けてしまうことを知りました。これからは正しく処理した上で、生活排水を流そうと思います。

三つ目は「十四・海の豊かさを守ろう」です。下水処理場では家庭・工場から排出される汚水を浄化し、海や川へと流しています。汚水をそのまま流してしまうと海や川は汚れ、環境が悪化します。そのため、私達が水を大切にすること、きまりを守って水を流すことは、海や川を大切にすることにつながります。

下水道の役割とSDGsについて調べ、このように下水道は持続可能な社会の実現に大きく影響すると分かりました。私達の衛生的で快適な生活は下水道によって支えられています。私は今まで、丁寧に水を使うこ

との大切さをよく理解していませんでした。安全な水がある快適な暮らしは、下水道での処理によって実現していること、私達の小さな行動がこれからの社会に大きく影響することが分かったので、もっと大切に、感謝して水を使っていきたいと思います。また、私だけだけでなく、多くの人が下水道の機能について詳しく知ること、大切に水を使うようになると思います。そうすることでより下水処理がされやすくなり、ゴールの達成に近づくことができるのではないかと思います。SDGsの十七番目のゴールは「パートナーシップで目標を達成しよう」です。一人一人の意識と行動が目標達成につながります。下水道のおかげで快適な生活を送っている私達みんな、身近な「水」の使い方から、明るい未来を創っていききたいです。

優秀賞（岩手県知事賞）

畏怖すべき大切なもの

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 島山 史子

はたけやま ふみこ

津波は一瞬にしてありとあらゆるものを飲み込みました。東日本大震災の時、私は内陸の安全なところに

いました。しかし、私の祖父母は大船渡に住んでいて、

祖父は陸前高田市内の病院に勤務していて被災しました。当時私は三歳で、震災のことはあまり覚えていません。家族に聞いたら、祖父母と連絡がつかず、とても心配したそうです。そこで父が大船渡へ祖父母を探しに行きました。母は断水と停電で復旧のめどが立たない状況の中でとても苦労しました。備蓄品を使って家族と避難してきた従兄弟たちみんなにご飯を食べさせたり、トイレを清潔に使ったりするために水が貴重だったと言っていました。

祖父の勤めていた病院はたくさん被災者が押し寄せ、残っていた食料や水はすぐに底を突きそうでした。

た。大きな貯水槽があったのですが、患者と病院スタッフと避難してきた人の数を数えて、料理はしない、洗濯はしない、お風呂を沸かさないと決めても一日分しか保たないということが分かりました。祖父は、病院の事務長をしていたので、食料よりも水の確保に奔走したそうです。

その後、緊急SOSを受けて、震災二日目から愛知県や静岡県から大きなトラックで水がどんどん運ばれました。どれほどかありがたかったことでしょう。それでも、送られてくる水をすべて、四百トン入る貯水槽に入れても、一日に二回入れないと足りません。震災当時、国内外からたくさんの方々が届いたことを決して忘れないと、今も祖父は言っています。祖父の話をして幼いころから聞いていた私は災害時に水が貴重だということをいつも心にとめるようになりました。

去年の夏休みに、赤十字の学習会に参加し応急手当や防災食のことを学びました。私たちの体は半分以上が水で出来ていて、水分が不足すると脱水症状が起こ

り、様々な問題が発生します。手洗いや歯磨き、洗髪など清潔にしなければ、感染症などの新たな問題も起こります。また、普段お米を研いで、水と一緒に炊飯器で炊きますが、災害時には炊飯器が使えないと考えられます。非常食のアルファ米は仮にお湯が用意できれば十五分、お湯が手に入らないときは水を入れて十分かかることが分かりました。この体験でもやはり水が必要だということが分かりました。

私の備蓄品リュックサックの中に五百ミリペットボトルを三本入れていますが、これは最低限の水分補給用で、一日でなくなってしまう量です。生活用水も含めると一日に一人三リットルは必要です。我が家にある水を家族全員で協力しても、よくて三日、悪いときは一日でなくなってしまうます。このことから、震災時、水は一滴でも無駄には出来ないということが分かりました。

今、私の家では、災害に備えた食料や飲料の備蓄方法の一つであるローリングストック法を心がけていま

す。製造日の古いものから食べたり飲んだりして、使った分を新しく購入することで、常に一定量の備えがある状態にしています。この方法は、備蓄を始めやすく、普段の生活をしながら備蓄でき、賞味期限を切らさないことによって災害発生時でも安心して水分をとることが出来ます。水は誰にとっても欠かすことの出来ない大切なものです。それは普段の生活でも、災害時でも変わりません。災害はいつ起こるか分かりませんが、万が一に備え、普段の生活からできることを心掛けていきたいと思えます。

震災の時、水は私たちに波となって襲いかかってきました。しかし、復興が始まると、水はとても必要になりました。東日本大震災から十年経ちましたが、「水は私たちが脅かす脅威にもなりますが、なくてはならないものでもある。」ということを学びました。

水は、畏怖すべき大切なものなのです。

優秀賞（岩手県知事賞）

大好きな北上川

盛岡市立上田中学校

二年 宮崎 祐奈子

雨。空から落ちてくるしずくを見ていてだけで、私は楽しくなる。私の住んでいる岩手県は自然がいっぱいだ。特に、私の家や学校から見える岩手山は四季それぞれに美しく、格別である。しかし、私は、たまに車に乗って通る舘坂橋から見える北上川も大好きな風景だ。大雨の時などは茶色く濁り、水かさが増えて少し怖いところもあるが、雨が降らないときは、とても澄んでいて綺麗だ。そんな北上川にも過去があったことを知ったのは、この作文を書くために調べていた時だった。北上川は、昔とても汚かったということだ。自分の大好きな川が、昔は汚かったことに落胆した。そして、何が北上川に起こったか、今はどうなったか、興味がわいた。

旧松尾鉱山。東洋最大級と言われた八幡平市にあっ

た硫黄鉱山だ。約四十五年前に閉山されている。この鉱山が、北上川が汚れた理由だと知った。私は、このことを母に話すと自分でも驚く意外な返答が返ってきた。「この鉱山の跡地を一度、家族と見に行ったことがある」母はそう言った。記憶をたどるように写真を見ると、現在は廃墟となっている多くのアパートが連なるように並んでいた光景を、うっすらと思い出すことができた。勿論当時は北上川と関係があることは知らなかった。私はさらに何があったのか調べる手を速めた。すると、この鉱山は、北上川の支流、赤川の上流に位置していたことが分かった。そして、この硫黄鉱山は、多くの食糧増産や化学工業に貢献していた功績を残している半面、硫黄鉱床と水、酸素が反応し、鉱道内から強酸性の鉱廃水が半永久的に排出されるといふ、負の遺産も残っていた。そのため、赤川や最終的に合流する、北上川も汚染されたという事態に陥った。しかし、旧松尾鉱山新中和処理施設という施設が昭和五十六年に作られたことで、「死の川」と言われていた

北上川が、「母なる川」によりみがえった。ここでは、鉄
バクテリアで酸化させた鉍毒水と炭酸カルシウムで中
和する新方式を使用した。さらに従来の処理で問題に
なっていたダムへの生成沈殿物の流入も防ぐことが可
能になった。およそ三十年以上にわたり、三百六十五
日、二十四時間休むことのない、新中和処理施設によ
る、鉍廃水処理により、北上川の清らかな流れは保た
れている。しかし、半永久的に鉍廃水は流れ出ている
ため、三十年たった今でも、この施設の運転は止める
ことが出来ないし、これからも止めることは難しいら
しい。

私は、今回自分の大好きな北上川が、昔、強酸性の
鉍廃水に汚染されていたが現在は中和処理施設により
水質が改善されていることを初めて知った。そして二
つの大切なことを学んだ。一つ目は、「過去に起きた失
敗は過去に戻って、正すことができない。だから、今
からの生活で、後で後悔しないように何をやるべきか、
何が正しいのか、しっかりと判断し生活すること」だ。

二つ目は、「もっと自分の住んでいる地域の過去や今に
ついて興味を持つこと」だ。私たち子どもは、意見を
言うことは難しいが、川辺のごみ拾いや、水道へその
まま油を流さないなどの未来に対して、今からでも注
意を引き締めていくことはできる。だから、私は今日
からでも未来の自分や周りの人が綺麗と思える川の風
景を少しでも残すために活動していきたい。北上川は、
「昔汚染されていた」という事実が変わらないし、な
くなりほしくない。しかし、多くの人の努力で、綺麗に
生まれ変わったこともまた、事実だ。私は、今日も北
上川が好きだ。これからもきつと変わらないだろう。
未来に向けて、できることを少しでも実践していき、
川の美しい流れを大切にしていきたい。

佳作（岩手県知事賞）

処理水と汚染水と報道と

盛岡市立上田中学校

三年 井筒いづつ 彩花あやか

「二〇二一年四月一日、日本政府は福島第一原子力発電所から排出されている処理水を福島県沖の太平洋に放出する計画を承認した。」このニュースを見た時、私はテレビから目が離せなくなった。

今年の三月一日に東日本大震災から十年を迎え、人々は改めて完全な復興を願い一つとなった。あの日、人類の恵みであるはずの水は私達に牙を剥き、町や人、心を破壊していった。それは福島第一原子力発電所も例外ではなく、大地震後、福島第一原発には津波が直撃。メルトダウンが発生し水素爆発が起こった。爆発の映像はテレビでも放映され、当時四歳だった私は今でもその映像を鮮明に覚えている。現在でもその事故の際の放射能汚染により入れない地域がある。

そんな福島第一原発で今問題となっているのが、「処

理水」の排出についてだ。福島第一原発では現在約一三〇万トンの処理水が巨大タンクに保管されているが、そのタンクは二〇二二年には満杯になってしまおうという。新たにタンクをつくる土地も底をついているため、政府はその処理水を福島県沖に放出しようとしているのだ。処理水にはトリチウムと呼ばれる放射能物質が残存しているため、各地で放出が反対されている。

「放射性物質」や「処理水」などといった言葉にどこか怖い印象を受ける人は多いのではないだろうか。「体に取り入れるなら危ない」「汚染されている水だ」そんな考え方が世間的に長期化・固定化してきた様に感じるが、それはなぜだろうか。私は原因の一つとして「報道」があると思う。

「日本政府は一三日、福島第一原子力発電所から排出されている放射性物質を含む一〇〇万トン以上の処理済みの汚染水を、福島県沖に放出する計画を承認した」これは冒頭の話題を報じた、とある新聞記事の一文だ。「処理済みの汚染水」言い換えれば「処理水」

だが、この文を見ると「汚染水」を放出しようとしているようにもとれる。処理水と汚染水はよく混合して捉えられるが、この二つの言葉は似て非なる言葉である。汚染水とは燃料由来の有害な放射性物質が含まれているため、そのまま放出すれば相応の汚染が起こる。

一方処理水は、汚染水から有害な放射性物質を除去し、放射線としてのエネルギーが非常に弱く、体に取り入れても新陳代謝等によって排出されるトリチウムのみを含む状態にまで無害化させたもので、世界中で海洋放出されている。比較してみると同一視してはいけない言葉だということが分かる。しかし、記事によっては、詳しい解説がない場合もあり、誤解が生まれる可能性もある。これが人々の不安や疑念につながり、結果的に風評被害として姿を現すのではないだろうか。

だからこそ大切なのは「知る」ことだ。表面上の言葉を見ただけで知っているつもりになるのではなく、水についての理解・知識を深めることで、問題は少しずつでも解決に向かうだろう。

もちろん、科学的には安全なことが分かっても処理水に対して不安を抱く人もいるだろうし、それは当然の感情でもある。正しい知識を取り入れた上での行動であればそれは意味のある行動と言えるのではないだろうか。

この処理水の排出の問題において誰もが納得し安心することは不可能だと思う。だからこそ、これ以上処理水の問題を保留にし続け損害を今以上に大きくするのはなく、存在するだけで風評被害を生んでしまう処理水を溜め続けるべきではないと思う。

身近なのに多くの人が詳しく知ろうとはしていない「水」。あの日から十年が経過した今、改めて私達は正面から「水」と向き合う必要があるのではないだろうか。

佳作（岩手県知事賞）

水と世界

盛岡市立大宮中学校

三年 関口 真子

「安全な水とトイレを世界中に」という言葉を知っているでしょうか。これは、持続可能な開発目標の一つです。誰一人残さない持続可能な社会の実現を目指すため、世界共通で定められた目標です。私はこの目標を達成するため、一人一人が責任を持って行動する必要がありますと考えます。

日本では当たり前のようにきれいな水を得ることができますが、世界には汚れていて衛生状態の悪い水しか得ることができない人が約二十億人いるといわれ、水不足が深刻になっています。その半数以上がアフリカに暮らしていて、泥や細菌などが混ざった不衛生な水しか手に入れることができない人が多くいるといわれています。また、二〇一七年の段階では、毎日八百人以上の乳幼児が汚れた水が原因で命を落としている

そうです。

世界で水が不足している原因として、水の使用量が増加していることや水源が守られていないことなどが挙げられます。世界の人口が増加することで水が足りなくなったり、都市開発で森林伐採をし、水を蓄える場所が減ってしまったりすることが水不足につながっています。他にも、地球温暖化で気候が変わり、雨が少なくなってしまったことも影響しています。

しかし、水不足は私達の行動で改善することができますのではないのでしょうか。都市開発などによる森林伐採は止められないとしても、水の使用量を減らす取り組みをすることは私達にもできると思います。水の使用量を減らすためにはできるだけ簡単な取り組みとして、節水があります。歯を磨くときや手を洗うときなどに水を出しっぱなしにしないようにしたり、お風呂の残り湯を洗濯に使ったりして節水をすることができます。シャワーを一分短くするだけで約十二リットルの節水をすることもできます。他にも節水をする、水の使

用量を減らすだけでなく、水をつくるためのエネルギーを節約することができると、二酸化炭素を減らすことができます。このことによって、地球温暖化の進行が抑えられ、水不足の改善に近づくことができます。

また、水を使えることに感謝することも水の使用量を減らすことにつながると思います。私は前まで、水があることが当たり前だと思っていたため、少し水が使えなくなっただけでも不便だと感じていました。しかし、世界の水不足などの問題を知り、水の価値観が大きく変わりました。このように考える人が増えることで自然にむだ使いをしなくなるようになると私は思います。

このように小さなことで水不足が改善するはずがないと思う人もいます。もちろん、一人が一日だけこの取り組みを行うだけでは意味はないでしょう。しかし、多くの人が毎日続ければ大きな力になると思います。効果はすぐに出ないとしても、必ず良い形になって私達に返ってくるはずですよ。

世界には、私達が手を洗っている水、飲んでいる水さえも手に入れることができない人がいます。世界を変えるチャンスは今しかありません。今を生きる私達は世界でおきている問題を人事だと思わずに、自分の行動に責任を持ち、一つ一つのことに感謝して生きるべきだと私は考えます。

さあ、今日も私はこまめに水を止めて、節水に励もうと思います。

佳作（岩手県知事賞）

水について考える

盛岡市立大宮中学校

三年 高橋 美桜

私の住む繋地区には御所湖というダムがあります。

このダムは北上川五大ダムの一つで、四つの重要なはたらきをもっています。

一つ目は、洪水調節です。御所湖は季節によって水位が変わります。六月から九月頃は水位が低くなりま
す。これは、梅雨や台風のとときにたくさん雨水をため
て、雫石川などの氾濫を防ぐためです。このはたらき
により盛岡市は水害から守られているのです。

二つ目は、水力発電です。御所湖では水が高いところから落ちる力で水車が回り、水車とつながる発電機
がまわることで電気がつくられています。御所湖の最
大出力は一万三千キロワット。一戸あたり二キロワッ
トとすると六千五百戸の家庭に電気を送ることができ
ます。この御所湖の働きで、私たちは、明るく暖かい

生活を送ることができます。

三つ目は、かんがい用水としての利用です。盛岡市
周辺や紫波町などの約五千ヘクタールの田畑に水を供
給しています。これにより米などの農作物をたくさん
つくることができます。

四つ目は、上水道用の水として利用されています。
盛岡市は御所湖の下流から水を取水しています。これ
をきれいにすることで安全な水になり、私たちの食事
や洗濯に使われています。

このように、御所湖には四つもの大きなはたらき
があり私たちの生活を支えてくれています。

私は、御所湖のすぐ近くに住んでいるけれど、御所
湖についてくわしく知ることは、小学五年生のころま
でありませんでした。私が小学五年生になったとき学
校で御所湖の見学に行くことになりました。見学では
はじめに御所湖を管理する人たちから話を聞きました。
ダムができる前の写真を見たときは本当に驚きました。
今の繋の様子と全く違いました。家の数もたくさんあ

りました。しかしそれらの家は御所湖をつくるために沈んでしまったことを知りました。沈んだ家に住んでいて、出ていかなければならなかった人はきつと辛かったと思います。

次に御所湖の地下の見学をしました。御所湖の地下の通路を特別に歩かせてもらいました。長い階段を上りきって出たのは御所湖の放流が行われる場所でした。高い位置から水が出て、かなり下まですごい勢いで落ちていました。放流されている場所の隣にはとても大きなゲートがありました。説明して下さった人はそのゲートを指さして、

「このゲートが開くと盛岡市は大変なことになってしまう。」

と、言いました。私はこれを聞いたとき御所湖の存在はとても大きいもので、市全体を守る大切な、なくてはならないものだと思いました。御所湖についてたくさんさんの説明を聞きました。しかし、この言葉だけでは今でも忘れることはできません。

私は、御所湖について考えたり、過去の経験を振り返ったりすることによって、御所湖についての印象が全く変わったことに気づきました。御所湖は今までもずっと近くにあったのでダムがあることが当たり前になっていました。しかし、もしこれがなかったら盛岡は水害に襲われ、人が住めなくなったり、水が足りなくなり米のとれる量が減ったりするかもしれないのです。水害を防ぎ、発電もできる御所湖は本当に大切な存在です。これからも人々のために毎日安全に運転してほしいです。私も御所湖を大切にしたいと思いました。

佳作（岩手県知事賞）

悠久の流れの中で

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 千葉^{ちば} 真桜^{まお}

初夏を迎え、水田の稲穂が青々と揺れる季節がやって来ます。照井堰は、一関の磐井川上流を水源に持つ、北照井堰、南照井堰、大江堰の三本の人工河川の総称です。その名前を聞いた事がある人は多いでしょう。では、それが古いものでは今から八五〇年以上前から存在することは知っていますか。

照井堰は平安時代、藤原秀衡の家臣である照井高春が土地を切り開き、かんがい目的として水路を通したと伝えられています。当時北上川や磐井川より標高の高い地域に住む人たちは、川の水を引くことが出来ず、稲作を行うことが出来ませんでした。水不足で、干ばつや飢饉に悩まされ続けた村人を救うため、高春は磐井川上流にある今の一関市巖美町小河原から水を引き、照井堰を造ったと言われています。

高春が水を引くことを決めた巖美町小河原は奥羽山脈の一角、栗駒国定公園の麓に位置し、年間を通して季節の移り変わりを感ずることが出来る地域です。春は桜、秋には紅葉を楽しむことができ、私も家族と共に良く足を運びますが、自然豊かな反面、山深い場所でもあります。今のような測量機器も建設機械もない時代に土地の高低差を調べ、水路を造ることは、さぞかし大変な事だったでしょう。

照井堰は少しずつ人の手によって造られたため、高春はその完成を見ることなく、志半ばでこの世を去りました。彼の死後、事業は子孫に引き継がれ、その後も様々な人たちが幾多の改修工事と補修を行い、長い年月と苦勞を重ねて、照井堰は完成しました。その中には、照井堰の重要性を理解し、私財を投じた者、自らを顧みず、工事に取り組んだ者も居たと伝えられます。照井堰の完成は、地域住民の悲願でもあったのです。

平泉町を流れ、衣川に注ぐ北照井堰は農業用水路と

してのみならず、毛越寺浄土式庭園の水源にもなっています。また南照井堰と大江堰は地域の穀倉地帯に水を供給し、私たちの生活を豊かにしています。更に照井堰は、農業用水としてだけでなく、火災時には防火用水として、大雨の時には雨水の排水を促し、洪水を防止する役割も果たしています。

照井堰の水は水田を潤すだけではなく、私たちの生活環境の安全にも一役買っているのです。

やがて時代が進むと共に、地域の様子も変わってきます。田畑は住宅地に変わり、道路が新しく整備され、市内の開発が進む中、照井堰はコンクリートや石積み姿を変えながらも大切に保護され、残されてきました。

照井堰は現在、照井土地改良区の方々や地域の人たちの手により、管理されています。私もよく堰の近くを通るので見慣れた風景です。水が滞りなく流れるように、用水路の草木を刈り取ったり、長い年月の間、水路の清掃と補修を繰り返し、大切に守られてきまし

た。先人の努力によって造られ、残されてきた照井堰用水は、今日も故郷の水田を満たし、私たちの生活を支えてくれているのです。

私は水田の稲穂が青々と揺れている景色が好きです。日本の原風景とも言えるその景色は、私が思い描く故郷の情景でもあります。その景色は、八五〇年以上前の平安時代から、先人たちの想いと共に守られてきた照井堰の水によってもたらされたものです。それらも私たちの時代で失うわけにはいきません。

照井堰は過去から現在に引き継がれてきた地域のかげがえのない宝物です。この先の未来にも伝えていけるよう、私も地域の一員として、生活排水の削減等、自分で出来る水質保護を心掛けたいです。悠久の流れの中で先人たちが大切に守ってきた照井堰を、私たちも小さな努力を積み重ね守っていきます。

佳作 (岩手県知事賞)

ありがとう、御所湖

盛岡市立大宮中学校

三年 吉田 優月
よしだ ゆづき

私の住んでいる盛岡市繫地区には、「御所湖」という美しい湖があります。岩手山をはじめとした、たくさんの山々を背景に、日光に照らされて輝く夏の御所湖は私の大好きな景色です。この他にも、冬は白鳥、夕方には真っ赤な夕日など、季節や時間ごとに違った美しさをを見せてくれます。そのため、週末になるとたくさんの観光客が訪れ、御所湖は地域住民だけでなく、市や県を超えた、たくさんの人達に愛されています。小学生のころには、御所湖ポスターを描いたり、御所湖周辺の清掃を行ったりした経験もあり、御所湖は私にとってとても身近な存在です。

そして、御所湖は美しい風景を私たちに見せてくれるだけでなく、「御所ダム」としてダムの役割も果たしています。しかし、私がそのことを知ったのは、小学

四年生の校外学習で御所ダム管理事務所を訪れたときです。そのときに、初めて御所湖の歴史や働きを知りました。

御所湖は、北上川の五大ダムの一つとして昭和五十六年に完成しました。五大ダムは、洪水による被害の軽減を図るためにつくられ、御所湖の他に四十四田ダム、田瀬ダム、湯田ダム、胆沢ダムがあります。御所湖は、この五大ダムの中でもっとも新しく、今までの技術が集結してつくられました。御所湖がつくられる前、そこには集落があり、私の祖父母の家もあったそうです。御所湖がつくられることになり、集落に住んでいた住民は、今住んでいる山側の地域に移り住んだと、祖父母が話しているのをきいたことがあります。たくさんの住民の協力があったからこそ、今の御所湖があるんだと感じました。御所湖の働きは主に四つあります。一つ目は、大雨の時に洪水にならないよう水の量を調節することです。二つ目は、ダムで溜めた水を利用して、発電することです。三つ目は、かんがい

用水として、盛岡市周辺から紫波町の田畑に水を供給することです。そして四つ目は、上水道です。このような働きで、御所湖は、私達の生活に大きく役立っています。

「御所湖がないとどうなってしまうんだろう」そう考えた時に思い出したのは、平成二十五年八月九日に起きた大雨による土砂災害です。当時、私は小学一年生でしたが、家の前の道路を茶色の雨水や、家具、木などが流れていく様子を今でも鮮明に覚えています。私の家は山にそれほど近くなかったので、大きな被害は受けませんでした。家の前まで水がおしよせ、とても怖かったです。しかし、川が氾濫することなどはなく、亡くなった方もいませんでした。今考えてみると、それは、御所湖が水の量を調節してくれていたからなんだと思います。日々、私たちの安全を守ってくれている御所湖は、繋地区にとって、必要不可欠で、なくなってしまうえば、私たちの生活は大変なことになってしまわないかと思えます。

ダムの建設は良いことだけでなく、大切な集落がなくなってしまうというデメリットもあります。そのため、ダム建設に反対する人も多いと思います。けれども、私達は今、御所湖があることで、便利で安全な生活を送ることができています。私は御所湖のことを誇りに思います。御所湖があることを当たり前と思わず、私たちの生活に安心を与えてくれる御所湖に感謝したいです。そして、これからも御所湖を大切にしていこうと思えます。ありがとうございます、御所湖。